

明治  
前期  
財政經濟史料集成

第三卷

大内兵衛  
土屋喬雄 編

明治  
前期  
財政經濟史料集成

第三卷

大蔵省沿革志(下)

大蔵省記録局編

原書房

(兩角製本)

昭和九年四月廿八日印刷  
昭和九年五月二日發行

明治前期財政經濟史料集成 第三卷

著

大 内 兵 衛  
土 屋 喬 雄

山 本 三 生

東京市芝區新橋七丁目十二番地

渡 邊 丑 之 助

東京市芝區愛宕町二丁目十四番地

發行所

改 造 社

東京市芝區新橋七丁目十二番地

振替口座東京八四〇二番  
電話 芝 (43) 自 一一二一番  
至 一一二四番

常磐印刷株式會社印刷

大藏省

(農商務省  
會計検査院)

編纂

大内兵衛校  
土屋喬雄

明治  
前期  
財政經濟史料集成

第三卷

本書の編輯に就いては、財団法人啓明  
會の補助に負ふ所多大である。特に  
記して謝意を表する。

編  
者

# 大藏省沿革志(下卷) 目次

|        |    |
|--------|----|
| 造幣寮 第一 | 三  |
| 紙幣寮 第一 | 五  |
| 紙幣寮 第二 | 四  |
| 記録寮 第一 | 一七 |
| 驛遞寮 第一 | 一六 |
| 驛遞寮 第二 | 一八 |
| 通商司 第一 | 二九 |
| 營繕寮    | 三〇 |
| 土木寮    | 三五 |
| 戶籍寮    | 三〇 |
| 貨幣司    | 三五 |
| 商法司    | 三七 |

|     |    |
|-----|----|
| 鑛山司 | 三六 |
| 用度司 | 三九 |
| 勸農寮 | 三七 |
| 正算司 | 三七 |

大藏省沿革志

（下卷）





# 編正 大藏省沿革志

## 造幣寮第一

### 造幣局

本寮ハ明治二年二月太政官中ニ造幣局ヲ置クニ起リ四月會計官ニ轉屬シ七月會計官ヲ廢シテ大藏省ヲ建ルノ日又々之ニ隸シ局ヲ改テ寮ト爲ス。四年八月陞セテ一等寮ニ班シ、以テ今日ニ至ル。今マ其ノ沿革ヲ編録ス。

明治二年四月八日太政官中ノ造幣局ヲ會計官ニ隸屬ス。

是ヨリ先キ元年四月新貨幣鑄造ノ議決スルニ因リ、西洋方式ノ器械ヲ使用セントシ此ノ事務ヲ參與會計事務局判事三岡八郎後ニ由利公正ト改稱スニ命ス。八郎乃チ參與外國事務局判事五代才助後ニ友厚ト改稱ス、寺島陶藏後ニ宗則ト改稱スニ商議シテ英吉利國人「ガラバ」ト訂約シ、價金六萬圓ヲ以テ香港ニ在ル英國ノ造幣器械ヲ購求ス。因テ橫濱裁判所用掛助勤上野敬助後ニ景範ト改稱スヲ香港ニ差遣シ、其ノ事ヲ管理セシム。二年二月五日太政官中ニ造幣局ヲ創置シ、議定中御門經之、參與三岡八郎

ニ造幣掛ヲ命シ、二十四日會計官權判事甲斐九郎後ニ下山尙ト改稱ス造幣局知事ニ遷任シ、新貨幣ノ鑄造ヲ掌管ス。太政官乃チ今達シテ宿弊ヲ釐正シ公正ニ料理シテ純粹ノ貨幣ヲ鑄造セシム令達文ハ本省ニ其職ス。三月四日參與會計掛大隈八太郎後ニ重信ト改稱ス、貨幣司判事久世治作建議シテ曰ク、我カ金銀貨幣ノ制タル古來一様ナラスト雖モ、其ノ形狀ヲ方ニスルハ實ニ近世ニ始マル、彼ノ甲州金貨ノ如キ其ノ形狀ヲ正圓ニシ慶長判金貨ニ至テ變シテ楕圓ト爲ス、蓋シ物ノ方ナルヤ轉輾

シ難クシテ摩損スル多ク、圓ナルヤ轉輾シ易クシテ摩損スル少ナシ、故ニ宇内各國皆之ヲ圓ニスルハ乃チ此ノ理ニ出ル者トス、且ツ貨幣ニ兩分朱ノ稱目アルハ蓋シ慶長判金貨ニ起原セリ、是レ漢土ノ重量四錢強ヲ一兩ト爲スニ取ル者ニシテ、慶長小判金貨ノ重量正サニ之ニ適合セリ、爾後舊幕府累次貨幣ヲ改鑄スルニ每ニ重量ヲ減殺ス、故ニ其ノ名ハ舊ニ仍ルモ其ノ實ハ大ニ異ナリ、且ツ分ハ兩ノ四分ノ一ニシテ朱ハ分ノ四分ノ一ナレハ、朱兩ハ重量ノ稱目ニシテ價位ノ數名ニ非ス、夫レ數ノ十進一位ナルハ萬國皆同シ、故ニ一百錢ヲ一圓ト爲シ一錢ノ十分ノ一ヲ一厘ト爲サハ計算上許多ノ煩ヲ省キ、流用ノ便ハ今日ニ倍セン。朝議即チ從前ノ價名ヲ廢シ、十進一位ヲ以テ新貨幣ノ價格ヲ定ム、八日造幣所ヲ大坂川崎ニ創營ス、九日造幣局知事甲斐九郎復タ會計官權判事ニ改任ス、十三日會計官權判事井田五藏後ニ讓ト改稱スニ命シテ造幣局知事ノ職務ヲ假攝セシメ、貨幣司判事久世治作造幣局判事ニ改任ス。六月二十四日西曆一千八百六十九年八月一日本官并ニ外國官東洋銀行ト貨幣鑄造條約書ヲ議定ス。

### 條約書

第一、日本政府ハ某國人某氏ヲ日本國造幣所ニ雇用スルヲ約定ス。第二、日本政府ハ東洋銀行ニ結約シテ雇用外國人ノ行爲及ヒ工事ヲ監視セシメ、又タ東洋銀行ヲシテ日本政府ニ對シ雇用外國人ヲ保任スル幹事者タラシム。第三、東洋銀行ハ雇用外國人ノ職務ヲ解免シ、或ハ所用ノ者有レハ他ノ外國人ヲ選擇シテ更ニ其ノ職務ヲ任命スル權ヲ有ス。第四、日本政府ハ東洋銀行及ヒ雇用外國人ニ報知セシテ造幣所ヨリ貨幣ヲ搬出シ、若クハ鑄造セサル可シ。第

五、若シ他ノ地方ニ造幣所ノ支局ヲ分設スル有ラハ、東洋銀行又タ其ノ雇用外國人ヲ管轄ス。第六、雇工期限ハ三年ト約定ス。但タ日本政府ノ計度ニ應ジ、四年若クハ五年ニ展期スル有ル可シ。日本政府ノ東洋銀行ニ交付スル金額ハ下項ノ比例ノ如シ。初年交付額洋銀二萬五千「ドルラル」、第二年交付額二萬「ドルラル」、第三年交付額一萬五千「ドルラル」若シ雇用ノ期限ヲ延展スル有レハ則チ之ニ増付スルニ下項ノ比例ヲ以テス。第四年交付額一萬「ドルラル」、第五年交付額一萬「ドルラル」、且ツ別ニ貨幣鑄造額千分ノ一ヲ酬勞資ト爲シテ交付ス。又タ日本政府ハ外國人居留地内ニ適宜ノ家屋ヲ建築シテ、之ヲ東洋銀行ニ委付シ、東洋銀行ハ建築經費額十分ノ一ヲ家租ト爲シテ日本政府ニ納致セシム。家屋ノ内部ノ修繕費ハ東洋銀行之ヲ支辨シ、外部ノ修繕費ハ日本政府之ヲ支辨ス。第七、此ノ定約ハ西曆一千八百七十年二月一日即チ我カ明治三年庚午正月元日ヨリ之ヲ施行ス。

七月八日會計官ヲ廢シ大藏省ヲ建テ、造幣局ヲ改メテ造幣寮ト爲ス。八月十四日會計官權判事假攝造幣局知事井田五藏生野縣權知事ニ轉任ス。

十八日長崎府判事兼外國官判事井上聞多<sup>後ニ疊ト改稱ス</sup>造幣頭ニ遷任ス。十月朔本省外ニ外務省英吉利國公使東洋銀行幹事ト造幣職工ヲ本寮ニ雇用スル約款ヲ議定ス。

### 條約書

第一、造幣職工ハ上工中工内ニテ四人、下工二人若クハ一人、月給額合計洋銀二千五百「ドルラル」ヲ供ス。第二、本國ヲ航發スル本日ヨリ橫濱港ニ航到スル本日マテハ、月給額ノ一半ヲ交付ス。第三、

鐵船錢并ニ飯食錢ハ上工中工共ニ郵船上等客室ノ供給ヲ以テシ、即チ每人ニ洋銀六百二十六「ドルラル」ト爲シ、下工ハ此ノ半額ヲ交付ス。第四、三年ニシテ雇約ヲ解ケハ、六月以前ニ解約ヲ報知シ、且ツ別ニ一年額ノ給金ヲ交付シテ資費ニ充ツ。若シ四年五年ニ展期スル有レハ、則チ東洋銀行ノ例法ニ依リ適當ニ措置セン。第五、家屋并ニ常用器具ハ之ヲ給貸ス。

十日山口藩士井上彌吉<sup>後ニ疊ト改稱ス</sup>造幣頭兼鑄山正ニ任ス。十二日造幣頭井上聞多民政部兼大藏大丞ニ任シ、大坂府大參事ノ職務ヲ攝行シ、造幣局判事久世治作造幣補助ニ改任ス。十八日當百銅錢ヲ鑄造シテ北海道ニ發行ス可キヲ太政官ニ稟議シ裁可布告ス。

本省民政部省連署稟議シテ曰ク、新貨幣ヲ鑄造スルヲ以テ舊貨幣改鑄ノ工事ハ一切休輟セリ。然ルニ即今當百銅錢ノ均合料塊ヲ貯蓄スル已ニ多シ、宜ク鑄造シテ北海道ニ輸送シ以テ行使セシムヘシ。必ス大ヒニ融通ノ便ヲ増サシム<sup>九月十日</sup>。

太政官裁可布告シテ曰ク、今回將ニ銅錢ヲ鑄造シテ民間ノ流用ニ供セシメントスルモ、先ツ北海道ノ開拓事業ニ資スル爲メニ當百銅錢ヲ鑄造シテ之ヲ發行ス。因テ普ク知悉セシム。

二十六日<sup>西曆一千八百六十九年十一月二十九日</sup>本省東洋銀行ト造幣士官ヲ本寮ニ雇用スル約款ヲ議定ス。

### 條約書

第一、日本政府ノ造幣寮ニ雇用スル外國士官ノ採擇ヲ東洋銀行ノ幹事ニ委任シ其ノ保證ニ任セシムルモ、凡ソ定約ノ意趣ヨリ生スル紛爭訴訟ノ如キ東洋銀行ノ關涉セサル可キハ日本政府之ヲ承諾

ス。第一、東洋銀行ヲシテ緊要ノ事項ヲ擔保セシムル爲メニ日本政府ハ洋銀六萬<sup>ドル</sup>ヲ東洋銀行ニ寄托シ、定約ヲ完了セハ之ヲ還納セシム。又タ外國土官ノ保證ニ任スル爲メニ東洋銀行ノ請求セル保證資金ヲ支付ス可キハ日本政府之ヲ承諾ス。但タ東洋銀行ノ實支額ニ超過セサル可シ。第三、日本政府ハ貨幣鑄造ノ方法ヲ設定シテ其ノ品質ヲ普告シ、一人ノ高官ヲ以テ造幣長官ト爲ス。凡ソ金銀料塊ヲ出納スルニハ必ス造幣長官ノ准許ヲ經サル可カラス。造幣長官ハ貨幣ノ鑄造ヲ指揮シ其ノ工業ノ景況ヲ記錄ス。又タ造幣寮ニ交付セル金銀料塊ハ造幣長官ヨリ之レヲ外國土官ニ交付シ、外國土官ノ造幣長官ノ命令ニ從ヒ貨幣ヲ鑄造スルニハ、日本政府ノ決定セシ重量ヲ全具スル純粹ノ貨幣ヲ鑄成スルヲ要ス。凡ソ貨幣ノ鑄造ニ關シ外國土官ニ下ス命令書ハ造幣長官ヨリ之ヲ外國土官ノ首長ニ付ス。但タ外國職工ノ工業ヲ執ルニ妨碍スル無カル可シ。第四、外國土官及ヒ外國職工ノ給金ハ日本政府月次ニ東洋銀行ニ交付シ、東洋銀行交付人名簿ヲ日本政府ニ上呈ス。第五、外國土官ノ造幣事業ニ使用スル日本職工及ヒ日本役夫ノ給金ハ日本政府之ヲ支辨ス。第六、外國土官ノ貨幣ヲ鑄造シテ日本政府ニ交納スルニハ、日本政府ノ長官或ハ其ノ指命スル代理官之ヲ領收ス。既ニ領收ノ以後ハ外國土官復タ之ニ干與セス、故ニ其ノ未タ領收セサルニ先タチ須ラク鑄造貨幣ノ純贋ヲ審鑒スヘシ。若シ議難ス可キ者有レハ其ノ事由ヲ東洋銀行ニ報知シ、又タ外國土官ニ對シテ爭議ス可キ事故アレハ亦タ之ヲ報知ス。第七、日本政府ト東洋銀行トノ間ノ計算ヲ清完スルハ、毎年六月盡日十二月盡日ノ兩次ヲ以テス。第八、嘗テ日本政府ト東洋銀行ト議定セル如ク五年ノ約期

ハ之ヲ解廢シ、更ニ初起ヨリ三年ノ後ニ至リテ改約セン。以上ノ各款ハ東洋銀行ノ擔保セル事項ヲ特記スル者ト爲ス。十一月四日夜造幣寮建築所ノ鍛冶場火ヲ失シ屋舎及ヒ木材悉ク焼亡シ、併セテ一庫ヲ焚キ造幣器械等過半灰燼ニ歸ス。

九日新貨幣ヲ發行スル決議ヲ外務省ヨリ各外國公使ニ報告ス<sup>三年三月二十日ノ條ヲ參觀</sup>可シ。

外務省報牒ニ曰ク、今者我カ政府前途多端ノ國用ニ供シ、且ツ内外ノ貿易ニ便スル爲メニ新様ノ貨幣ヲ鑄造シテ之ヲ發行シ、以テ舊來ノ貨幣ト並行セシムルノ議ヲ決セリ。新貨ノ其ノ本位ニ充ル者重量ハ七匁二分二厘五毛九二<sup>即チ英吉利國ノ「トロイ」重量ヨリ減セス、四百一十六グレインニ當ル</sup>、質分ハ純銀十分ノ九ヲ以テスル銀貨ニシテ、墨西哥銀貨ト同一ノ品位ト爲シ、別ニ四種ノ銀貨ヲ鑄造ス。但タ其ノ品量ハ未タ精細ヲ極メスト雖モ、大抵其一ハ重量三匁六分一厘二毛九六<sup>即チ重量ニ當ル</sup>、其二ハ重量一匁八分〇六毛四八<sup>即チ「百〇四」グレインニ當ル</sup>、其三ハ重量七分二厘二毛五九<sup>即チ「四十二」グレインニ當ル</sup>、其四ハ重量三分六厘一毛二九<sup>即チ「二十」グレインニ當ル</sup>ヨリ減セス。質分ハ共ニ純銀十分ノ八ヲ以テス。此等ノ貨幣ハ唯タ日用ノ便利ヲ資ケ少數ノ行使ニ充ルノミ、又タ金貨三種ヲ鑄造ス。其ノ品量ノ如キ亦タ未タ精細ヲ極メスト雖モ、大抵其一ハ本位銀貨ノ一十個・其二ハ五個・其三ハ二個半ノ價位ニ當ル。而シテ是レ亦タ唯タ日用ノ便利ヲ資ケ少數ノ行使ニ充ルノミ、但タ相ヒ和協シテ多額ヲ授受スル如キハ此ノ限外ニ在リ。別ニ本位銀貨ノ百分ノ一及ヒ千分ノ一ノ價位ニ當ル銅貨ヲ鑄造ス。又タ造幣ノ事業ハ我カ政府ニ雇用スル外國人ノ明年春初ニ我國ニ航到スルヲ待チ以テ精細ニ協定セントス。其ノ外國人ハ我カ造幣寮ニ奉

職シ、我カ政府ノ決定セシ重量質分ニ適合スル貨幣ノ鑄造ニ從事セシムル者トス。以上各事項ノ委曲ハ造幣寮ノ開業以前ニ報告ス可ク、爾後ニ在テハ確實ノ報告ヲ爲スニ非サレハ則チ變更スル無カル可キナリ。凡ソ此等ノ措置ノ如キ我カ政府ノ見ニ西洋各國ノ施行セル所ニ倣ヒ、縝密ニ之ヲ施行スルヲ證明スルヲ望ム。又タ我カ慶應二年丙寅五月十三日即チ西曆一千八百六十六年六月二十五日ノ條約ニ照シ、我カ政府ニ領收スル鑄造費ノ比例ヲ商議セント要ス。蓋シ此ノ造幣ノ事業タル我カ政府ハ鉅多ノ財用ヲ要セサルヲ得ス。故ニ最初ニ於ル鑄造費ハ百分ノ三ヨリ減セサル比例ヲ以テ約定セン。而シテ鑄造貨幣ハ金銀料塊ヲ領收スル以後ノ三十日ヲ限り造幣寮ニ之ヲ交付ス可シ。又タ金銀料塊若クハ外國ノ金銀貨幣、若クハ見今通用スル我國ノ金銀貨幣及ヒ殘存スル我國ノ舊金銀貨幣ヲ携齎シテ新貨幣ニ交換セント欲スル者ハ、何國ノ人ヲ問ハス、其ノ料塊若クハ貨幣ヲ造幣寮ニ領收シテ品質ヲ鑒定シ、本價額ノ計内ヨリ鑄造費ヲ扣除セル價額ニ準算シテ新貨幣ヲ交付ス。但タ我カ政府ハ舊貨幣ノ名目ノ價格ヲ以テ新貨幣ト交換スルヲ聽サス。抑モ我カ政府ノ主旨ハ盛シニ新貨幣ヲ發行シ、國內ノ情勢ヲ觀察シテ漸次ニ舊貨幣ヲ廢停セント欲スルニ在リ。然ルニ唯タ廢停スルニ急ニシテ倉卒輕遽ノ措置ヲ爲スヲ欲セス。故ニ舊貨幣モ亦タ我カ國人ノ行使ニ便スルノ間ハ依然之ヲ通用セシム可ク、且ツ外國人ノ納税ニ充テシムルモ亦タ前例ニ依リ毫モ妨碍スル有ル無シ、又タ外國人ノ本位銀貨ヲ以テ納税ニ充ルヤ、我カ政府ハ墨西哥銀貨ト同一ノ價位ニ當テ之ヲ領收ス可シ。因テ此ニ牒告ス。本月十四日ヲ以テ各國領事ニ寄致スル書牘ハ行文關辭ニ差異アリト雖モ其ノ旨趣ハ則チ同シ故ニ今々略ス。

十二日諸藩ニ令シテ、銅製ノ煩礮ヲ輸納セシメ以テ新鑄貨幣ノ料塊ニ供ス。三年四月十二日、條ヲ參照ス可シ。

太政官宣達ニ曰ク、今者新貨幣ヲ鑄造ス。故ニ諸藩ノ蓄藏セル銅製煩礮ノ無用ニ屬スル者ハ、相當ノ價直ヲ評定シテ官府ニ買收セントス。宜ク東京眞崎鑄錢座ニ申報シテ急速ニ輸送スヘシ。且ツ便宜ニ因リ鑄毀シテ輸送スルモ妨ケ無シ。其ノ詳悉ナル料理方ハ大藏省ニ稟問セヨ。

十九日府藩縣管轄内ニ開採スル鑛山ノ地所并ニ鑛物ノ數額ヲ錄上セシム。

民部省申達ニ曰ク、今者政府新ニ貨幣ヲ鑄造ス。是ヲ以テ府藩縣管轄内見ニ開鑿セル金銀銅ノ鑛山ノ地所并ニ毎歲採收スル鑛物ノ數額ヲ詳記シ、本年内ヲ限り我省ニ送ス可シ。又タ其ノ採收スル金銀銅ハ東京大藏省及ヒ大坂大藏省支衙ニ於テ相當ノ價格ヲ評定シ、以テ之ヲ買收ス。宜ク兩地ニ輸送シテ大藏省ニ開申スヘシ。私ニ各地ニ販賣スルヲ禁止ス。

明治三年二月二日西曆一千八百七十年三月三日英吉利國人「キンドル」ヲ招致シテ造幣首長ニ任シ、東洋銀行其ノ雇用條約ヲ締定ス。

定約書ノ譯文ニ曰ク、日本政府新タニ造幣寮ヲ國內大坂ニ建築シテ以テ貨幣ヲ鑄造セントス、因テ其ノ工事ヲ董管スル職員、即チ造幣首長以下ノ職員及ヒ職工ノ選任ヲ我カ東洋銀行ニ委託セリ、乃チ西曆一千八百七十年三月三日東洋銀行ハ職員選任ノ委託ヲ受ケタル權限ニ依據シ、嘗テ清國香港ニ開設セル英吉利國造幣寮ノ管長ニ任シタル英吉利國「ワルウイキ」州南「ラツジ、シント、マリ」、レイミングトン、フリオルアル」ニ居住スル人士「トーマス、

ウキルリヤム、キンドル」ト約シテ、之ヲ日本國造幣寮ノ首長ニ任シ、以テ其ノ職掌ヲ擔理セシメ「キンドル」ハ約款職制章程ヲ恪守ス可キヲ承諾ス、乃チ東洋銀行ハ其ノ繼嗣者、社產ノ購買者「キンドル」ハ其ノ受託者、家產ノ管理者相俱ニ約シテ證憑ヲ立定スル左項ノ如シ。

### 約款

第一、東洋銀行ハ下款ニ記載スル俸金ヲ給與シ、以テ「キンドル」ヲ造幣首長ニ選任ス。第二、任職ノ期限ハ「キンドル」ノ日本國ニ航到スル本日より三周年間ト爲シ、此ノ期限ニ至リ、若クハ期限ノ滿過スル以後ニ至リ、彼此ノ便宜ヲ以テ仍ホ此ノ定約ヲ繼續セント要セハ、期限ニ先ツ六月ニ於テ一方ヨリ其ノ事由ヲ簡牘ニ具シ、以テ他ノ一方ニ通報ス。第三、俸金即チ「キンドル」ニ給與スル酬勞金ハ毎月一千〇四十五「ドル」日本ノ通貨ニ換算スニ比例ニ照シ、東洋銀行ヨリ之ヲ交付ス。第四、東洋銀行ハ「キンドル」ノ「ベニンシ」オリエンタルバンクノ郵船、若クハ太平洋ノ郵船ニ便搭シテ英吉利國ヨリ日本國大坂ニ航行スルニハ第一等船客ノ旅費金ヲ豫支シ、且ツ此ノ航行ノ爲メニ「キンドル」ノ需要スル物品、或ハ自支スル費用、或ハ日本國造幣寮ノ官署ニ到達スルマテニ臨時ニ支用スル雜費ノ如キハ東洋銀行之ヲ豫支シ、若クハ之ヲ追償ス。第五、「キンドル」ノ航程間ノ俸金ハ一月五百二十二「ドル」半ノ比例ニ照シ、其ノ乗船スル本日より起算シテ之ヲ豫支シ、若クハ之ヲ追償ス。第六、東洋銀行ハ若シ三周年ノ期限未タ滿タサル以前ニ即今協定セル約款ニ違背スル有ラハ、「キンドル」ノ其ノ已ニ領收セシ俸金ノ額外ニ於テ、別ニ第三款ニ明記セル毎月一千〇四十

五「ドル」半ノ比例ヲ以テ、三周年ノ期限ノ滿過セシ日より起算シ、第四周年額ニ當ル俸金ニ均シキ金額ヲ賠償ス。此ノ金額ハ違約ノ賠償タルヲ以テ東洋銀行ヨリ即時ニ交付セン。第七、三周年ノ期限ニ至リ若クハ期限ノ滿過スル以後ニ至リテ「キンドル」ノ其ノ職任ヲ解カント請求シ或ハ日本國ニ到達セル以後五周年ノ滿期ニ際シ若クハ爾後ノ幾月ヲ過キテ辭職ニ決意セハ、六月以前ニ東洋銀行ニ寄東シテ事由ヲ豫報シ、東洋銀行ハ一周年ノ俸金ニ準算スル金額ヲ養老資ト爲シテ以テ俸金ニ加給ス。第八、東洋銀行ハ時宜ト事情トニ應ジ「キンドル」ノ英吉利國ニ還歸スル日ニ於テ、第四款ニ掲記セル航行旅費ト同額ナル航歸旅費及ヒ其ノ航歸ニ要スル雜費ヲ給與シ、且ツ航程間ノ俸金ハ第五款ニ掲記セル如ク一月五百二十二「ドル」半ノ比例ニ準算シテ以テ給與ス。然レモ、「キンドル」ノ日本國ニ到達スル本日より五周年ノ期限ノ未タ滿タサル以前ニ、辭職還歸ヲ東洋銀行ニ申請スル有ラハ、前款ニ掲記セル養老資及ヒ旅費金ヲ給與セス。但タ疾病ニ因テ辭職還歸ヲ申請スル如キ、養老資、旅費金并ニ航程間ノ俸金ヲ給與スルハ、職事ヲ完了シテ還歸スルト同視ス。是レ東洋銀行ト「キンドル」ト協約スル所ニシテ、此等ノ金額ハ亦タ東洋銀行ヨリ即時ニ交付セン。第九、東洋銀行ハ「キンドル」ノ爲メニ壯麗ナル家屋并ニ常用器具ヲ準備ス。其ノ供給ノ等差ハ、日本國ニ設置セル東洋銀行支社ノ第一等首長ノ爲メニ準備スル者ニ比擬ス。第十、日本政府ハ雇用外國人ニ國內經行ヲ許可スル例則ノ在ル有リ、故ニ「キンドル」モ亦タ例則ニ照シ稟請セハ其ノ許可ヲ得ン。第十一、「キンドル」ハ其ノ身上ニハ、一切ニ貨財ニ關スル責任ヲ有スル無シト雖モ、英吉利國不

文律法ノ規則ニ背反シテ、其ノ職掌ヲ囁囁スル有レハ、則チ東洋銀行ノ督責ヲ受ケサル可カラス。

以上ノ條約ヲ締定セルニ因リ、「キンドル」ハ其ノ受託者家産ノ管理者、東洋銀行ハ其ノ繼嗣者社産ノ購買者相俱ニ契約證書ヲ作り、更ニ證憑ヲ立定スル下文ノ如シ。

「キンドル」ハ前款ニ明記セル職掌契約及ヒ規程ニ格遵シテ、造幣首長ノ職掌ヲ擔任シ、第一次ノ郵船ニ便搭シテ日本國ニ航行ス可ク、其ノ就職以後能ク心力ヲ職掌ニ盡シテ造幣首長ノ責任ニ負カス、凡ソ造幣事業ニ關スル法制ヲ整理シ、確實ノ意見ヲ立テ、善良ノ方圖ヲ按シ、以テ造幣寮中ノ各局ヲ管轄シ、且ツ東洋銀行及ヒ日本政府ノ損害ヲ防ク爲メニ合宜ノ方法ヲ定メ、其ノ施爲ノ制限ヲ設クルヲ要ス。凡ソ貨幣料塊等其ノ管轄ニ屬スル者ヲ他人ニ授付スルニハ、正確ナル領受證票及ヒ明細證書ヲ徵收シ、「キンドル」モ亦タ領受證票ヲ交付ス可シ。且ツ造幣寮ニ輸致スル料塊ヲ鑒檢シテ、品位價格ヲ量定シ、造幣ノ料ニ適スルト適セサルヲ正確スルヲ專務ト爲ス。

別款ニ曰ク、造幣寮ノ開業以前ニ東洋銀行ト日本政府ト協約スルヲ要ス可キ者有リ、造幣寮申計算局事務ノ處辨即チ是ナリ。此ノ計算局ノ事務タル、本ト造幣長官若クハ次官ノ處辨ニ屬シ、「キンドル」ノ管知スル權内ニ在ラスト雖モ、實際造幣工業ニ關スル各般ノ方法ノ如キハ造幣首長ノ制限スル所ニ從テ操作スルヲ要ス。

又タ「キンドル」ハ造幣工業ヲ管理スル爲メニハ、日本國人ト歐羅巴洲人トヲ論セス造幣寮ノ官員造幣長官及ヒ計  
算局官員ヲ除クニ超過スル統轄ノ公權ヲ有シ、而シテ造幣寮ノ官員ハ深ク信シテ以テ「キンドル」ノ指

揮ニ服從セサル可カラス。又タ貨幣ノ鑄造ヨリ凡ソ「キンドル」ノ管知スル事項ニ關シ、造幣長官ノ公告スル文書ハ、總テ其ノ發布以前ニ「キンドル」ニ開示スルヲ要ス、蓋シ是レ其ノ果シテ公告ス可キ者タルト否ラサルヲ檢覈セシムルヲ要スレハナリ。

又タ曰ク、此ノ契約證書ハ若シ將來ニ於テ其ノ條款ニ關シ、彼此ノ間ニ紛議ヲ起生スル有ラハ、其ノ證憑ニ供スル者ニシテ其ノ紛議ノ曲直ヲ判決スルハ、日本國ニ駐在セル英吉利國公使兼總領事「ハल्ली、スミッツ、パークス」閣下如クハ其ノ代理官ノ審理ニ委カス。此ニ契約ノ確實ナルヲ證明スル爲メニ、契約證書ノ起頭ニ掲載セル年月日ニ於テ、東洋銀行ハ社印ヲ押シ、「キンドル」ハ名ヲ署シ印ヲ捺ス。

三月二十日 西曆一千八百七  
十年四月二十日 英吉利・獨逸・米利堅・佛蘭西四國公使、書牘ヲ外務省ニ贈致シテ、新貨幣ノ鑄造ニ關スル事宜ヲ論議ス。  
本年十月二十九日  
ノ條ヲ參觀ス可シ。

英吉利國公使ノ書牘ノ譯文ニ曰ク、去歲十一月九日吾及各公使ニ寄示セル公簡ヲ領悉ス。來旨ニ曰フ、我邦政府通用貨幣ヲ改定シ、造幣寮ニ於テ鑄造スル本位銀貨ノ品位并ニ重量ハ墨西哥銀貨ト同一ニシテ、多數ノ授受ニ供シ、別ニ少數ノ授受ニ供スル小銀貨四種ヲ鑄造シ、併セテ金貨三種、銅貨二種ヲ鑄造セントス。然ルニ未タ細密ニ其ノ品量ヲ定ムルニ及ハス、ト。思フニ此等ノ貨幣タル、應ニ是レ貴國內ニ限リ行使スル者ナルヘキモ、其ノ授受スル數額ニ制限ヲ設ケ、凡ソ某貨ハ幾許ニ限ルト豫定セハ則チ内外ノ貿易ニ便シ、且ツ能ク外國ニ慣用スル例法ニ合スルヲ得可シ。又タ來旨ニ曰フ、鑄造費ハ目今姑ラク百分ノ三ヨリ減セサルヲ要ス、

ト。此ノ事ヤ貴國政府若シ之カ商議ヲ爲スヲ欲セハ、下官輒チ命ニ應ジ協定セン。但タ一千八百六十六年六月二十五日ニ約定セル稅則ニ照シ、貴國政府各開港場ニ於テ、金銀料塊若クハ外國貨幣ヲ日本貨幣ニ交換スル方法ハ確然履行スルヤ。請フ之ヲ報知スルヲ。又タ來旨ニ曰フ、造幣寮ニ於テ金銀ノ料塊、日本及ヒ外國ノ貨幣ヲ授受スルニハ、其ノ價格ヲ評定シ而シテ稱呼ニ相當スル新貨ヲ交付セス、品量ニ相當スル新貨ヲ交付ス、ト。蓋シ是レ外國貨幣ニ關シテハ一千八百六十六年六月二十五日、及ヒ爾後ニ締結シタル條約ニ照シ、鑄造費ヲ扣除セシ殘額ニ相當スル新貨ヲ交付シ、而シテ貴國貨幣ノ其ノ已ニ通用ヲ停止セル者、并ニ見ニ通用スル者モ亦タ之ト同一ノ方法ニ據テ交付スルナル可シ。然ルニ見今流布スル一分銀貨及ヒ二分金貨ハ濫ニ其ノ品量ヲ變換セル者ノ如クニシテ、復タ前年結約セシ品量ニ適當スル價格并ニ貴國政府ノ吾及各公使ニ通報セシ價格ヲ有セサル歟ニ疑ヒ無キ能ハス。前年ノ結約ニ依ルニ、一分銀貨ノ品位ハ純銀十分ノ九ニシテ、其ノ重量ハ「トロイ」重量一百三十四「クレイン」ナリ。又タ貴國政府ノ吾及各公使ニ通報セシ一千八百六十九年八月二十一日ノ公簡ニ依ルニ、粗惡ノ二分金貨ハ本量八分ノ計内純金一分七厘六毛、純銀六分二厘四毛、即チ百分ノ二十二分ハ金ニシテ、七十八分ハ銀ナリ。然リト雖モ、一分銀貨二分金貨共ニ其ノ實價ノ有無ニ疑ヒ無キ能ハサルニ因リ、縱ヒ來旨ノ如ク造幣寮ニ於テ新貨ニ交換スルニハ、其ノ稱目ノ實價ヲ以テセサルモ亦タ宜ク一分銀貨ハ一千八百六十六年六月二十五日ニ結約セシ價格ニ照シ、鑒封ノ二分金貨ハ一千八百六十九年八月二十一日吾及各公使ニ通報セシ價格ニ照

シテ交換スヘキナリ。故ニ貴國政府若シ能ク條理ヲ履ミ公道ニ由ラハ、此ノ如ク交換スルモ決シテ折損ヲ受ル無カル可シ。但タ倘シ劣惡ナル貨幣ヲ發行セハ、隨テ自カラ折損ヲ受ルヲ免カレサルノミ。又タ來旨ニ曰ク、目今通用スル貨幣ハ外國人ノ之ヲ納稅ニ充ルヲ妨ケス、ト。然ルニ貴國政府ノ通報セシ所ニ依レハ、二分金貨ノ發行額ハ五千萬兩ニ及ヘリ。是ニ由テ之ヲ觀レハ、此ノ額内ニ於テ、外國人ノ納稅ニ充ル者ハ實ニ僅少ニ屬ス。然ラハ則チ、貴國政府ハ貴國人民ニ對シ、何等ノ稅目ニ限り、此ノ種ノ貨幣ヲ以テ納致スルヲ許セル耶。且ツ既ニ貴國政府ニ收回セル此ノ種ノ貨幣ハ、見ニ幾許ノ數額ニ上レル耶。是レ吾及各公使ノ其ノ詳委ヲ與リ知ラント欲スル所ナリ。又タ外國人貴國人ノ納致セル此ノ種ノ貨幣ハ再ヒ流用スル無ク、必ス之ヲ改鑄ニ付ス可キ確實ノ報告ヲ爲サハ則チ大ヒニ内外國人ニ便益スル有ラン。之ヲ要スルニ、本件ノ措置タル、均シク彼此國人ノ利害ニ關係スル者ナルモ、先ツ請フ我カ英吉利國人ノ見ニ貯有スル一分銀貨及ヒ二分金貨ノ處置ヲ査定シ、以テ迅速ニ回示スルヲ（獨逸、米利堅、佛蘭西三國公使ノ贈致スル書狀ノ旨趣モ亦タ之ト大同小異ナリ、故ニ今マ略ス。）

二十三日慶長五年庚子以降ニ鑄造シタル金銀銅各貨幣ノ數額ヲ查計ス納司ノ稽查セシ  
所ノ者ニ據ル。

#### 金貨

慶長五年庚子ヨリ鑄造額  
元祿八年乙亥マテ

#### 慶長金貨

元祿年間官庫燒燬シ、簿書灰燼ス。故ニ鑄造額ヲ確知ス可カラ  
ス。元和元祿ノ間ニ鑄造シタル金貨ハ、其ノ質分純美ニシテ、



價格輕重共ニ慶長金貨ト同一ナリ。故ニ總テ慶長金貨ト稱ス。  
下文ノ元祿金貨ト稱スル者亦タ此ノ例ニ同シ。

一千〇五十二萬七千一百八十三兩三分ヲ收回ス。

元祿八年乙亥ヨリ  
寶永七年庚寅マテ 鑄造額

元祿金貨一千三百九十三萬六千二百二十〇兩一分

計内一千三百二十一萬四千〇二十三兩二分二朱ヲ收回シ、七十

二萬二千一百九十六兩二分二朱ヲ殘存ス。

寶永七年庚寅ヨリ  
正徳四年甲午マテ 鑄造額

乾字金貨一千一百五十一萬五千五百兩

計内一千一百二十〇萬二千七百三十九兩二分ヲ收回シ、三十一

萬二千七百六十〇兩二分ヲ殘存ス。

正徳四年  
甲午 鑄造額

武藏判金貨二十一萬三千五百兩

計内一十九萬六千七百五十二兩一分ヲ收回シ、一萬六千七百四

十七兩三分ヲ殘存ス。

享保丙元年申ヨリ  
元文元年丙辰マテ 鑄造額

享保金貨八百二十八萬兩

計内七百三十二萬五千三百七十五兩三分ヲ收回シ、九十五萬四

千六百二十四兩一分ヲ殘存ス。

元文元年丙辰ヨリ  
文政元年戊寅マテ 鑄造額

元文金貨一千七百四十三萬五千七百一十一兩一分

計内一千四百二十八萬九千四百七十一兩ヲ收回シ、三百一十四

萬六千二百四十〇兩一分ヲ殘存ス。

文政元年戊寅ヨリ  
天保八年丁酉マテ 鑄造額

眞字二分金貨二百九十八萬六千〇二十二兩

計内二百八十六萬一千七百九十九兩二分ヲ收回シ、一十二萬四

千二百二十二兩二分ヲ殘存ス。

文政二年己卯ヨリ  
十一一年戊子マテ 鑄造額

文政金貨一千一百〇四萬三千三百六十兩

計内八百九十〇萬六千八百五十三兩三分ヲ收回シ、二百一十三

萬六千五百〇六兩一分ヲ殘存ス。

文政七年甲申ヨリ  
天保三年壬辰マテ 鑄造額

一朱金貨二百九十二萬〇一百九十二兩

計内二百九十〇萬一千九百六十九兩〇一朱ヲ收回シ、一萬八千

二百二十二兩三分三朱ヲ殘存ス。

文政十一年戊子ヨリ  
天保三年壬辰マテ 鑄造額

草字二分金貨二百〇三萬三千〇六十一兩二分

計内一百九十一萬〇五百六十七兩ヲ收回シ、一十二萬二千四百

九十四兩二分ヲ殘存ス。

天保三年壬辰ヨリ  
安政五年戊午マテ 鑄造額

古二朱金貨一千二百八十八萬三千七百〇〇兩一分

計内五百六十三萬〇六百七十七兩三分二朱ヲ收回シ、七百二十

五萬三千〇二十二兩一分二朱ヲ殘存ス。

天保八年丁酉ヨリ  
十四年癸卯マテ 鑄造額

五兩金貨一十七萬二千二百七十五兩

計内一十二萬七千五百兩ヲ收回シ、四萬四千七百七十五兩ヲ殘

存ス。

天保八年丁酉ヨリ  
安政五年戊午マテ 鑄造額



天保金貨八百一十二萬〇四百五十兩

計内四百七十三萬三千六百八十八兩一分ヲ收回シ、三百三十八萬六千七百六十一兩三分ヲ殘存ス。

安政三年丙辰ヨリ鑄造額  
萬延元年庚申マテ

安政二分金貨三百五十五萬一千六百兩

計内一百六十二萬〇八百〇五兩二分ヲ收回シ、一百九十三萬〇七百九十四兩二分ヲ殘存ス。

安政六鑄造額  
年已未

正字金貨三十五萬一千兩

計内二十七萬七千六百一十五兩二分ヲ收回シ、七萬三千三百八十四兩二分ヲ殘存ス。

元祿金貨以下正字金貨以上ノ各項ノ殘存額、通計金二千〇二十四萬二千七百五十三兩二分三朱ト爲ス。

萬延元年庚申ヨリ鑄造額  
慶應三年丁卯マテ

新小判金貨六十二萬五千三百五十兩

新一分金貨四萬一千六百五十兩

萬延元年庚申ヨリ鑄造額  
明治元年戊辰四月マテ

新二分金貨四千六百八十九萬八千九百三十二兩二分

萬延元年庚申ヨリ鑄造額  
文久三年癸亥マテ

新一朱金貨三百一十四萬兩

明治元年戊辰ヨリ鑄造額  
二年己巳二月マテ

新二分金貨二百〇六萬八千四百二十四兩二分

新二分金貨一百七十四萬六千九百六十四兩鑄造額大坂

新金貨鑄造額、通計金五千四百五十二萬一千三百一十一兩ト爲ス。

### 銀貨

慶長六年辛丑七月ヨリ鑄造額  
元祿八年乙亥八月マテ

慶長銀貨一百二十萬貫匁

元祿八年乙亥九月ヨリ鑄造額  
寶永三年丙戌五月マテ

元祿銀貨四十〇萬五千八百五十貫匁

寶永三年丙戌七月ヨリ鑄造額  
七年庚寅二月マテ

寶永銀貨二十七萬八千一百三十貫匁有奇

寶永七年鑄造額  
庚寅三月

永字銀貨五千八百三十六貫匁

寶永七年庚寅四月ヨリ鑄造額  
正德元年辛卯七月マテ

三寶銀貨三十七萬〇四百八十貫七匁有奇

正德元年辛卯八月ヨリ鑄造額  
二年壬辰九月マテ

四寶銀貨四十〇萬一千二百四十貫匁有奇

正德四年甲午八月ヨリ鑄造額  
元文元年丙辰四月マテ

享保銀貨三十三萬一千四百二十貫匁有奇

元文元年丙辰六月ヨリ鑄造額  
文政元年戊寅マテ

文字銀貨五十二萬五千四百六十五貫九百匁有奇

計内四十九萬一千三百貫匁ヲ收回シ、三萬四千一百六十五貫九百匁有奇ヲ殘存ス。

明和二年乙酉八月ヨリ鑄造額  
安永元年壬辰八月マテ

五匁銀貨一千八百〇六貫四百匁

文政三年庚辰五月ヨリ鑄造額  
天保八年丁酉八月マテ

新文字銀貨二十二萬四千九百八十一貫九百匁

計内二十〇萬七千一百六十五貫匁ヲ收回シ、一萬七千八百一十